

序にかえて

— 不確実性に向き合い、動き、生きる—

二文字屋 脩*

本特集は、同時代における遊動民的生のあり様を人類学的視点から考察することで、定住中心主義の相対化を目指しつつ、今日の文脈において遊動を議論することの可能性を広く模索することを目的としている。本特集の基盤となったのは、2018年3月3日に南山大学で行われた公開シンポジウム「不確実な世界に住う——遊動／定住の狭間に生きる身体」である。同シンポジウムでは、狩猟採集民、遊牧民、家船漁民、ジプシー、スラム住民を研究対象とする5名の若手研究者が、「不確実性」をキーワードに、遊動という生活様式に共通性を見いだしながら研究発表を行い、2名のコメンテーターとともに会場を巻き込んで議論が交わされた。本特集は、同シンポジウムでの成果と反省を踏まえながら、発表者それぞれが改めて自身の研究課題に向き合いながらまとめ上げたものである。序として、ここではシンポジウムの企画立案をした筆者から、本特集のキーワードに言及しながら、本特集に通底する問題意識を共有したい。

KeyWords

遊動／定住
不確実性
定住中心主義
遊動実践
遊動性

約 700 万年にも及ぶ人類の歴史の 99%以上が狩猟採集の時代であったことはよく知られている。人類は長らく、食料資源を狩猟・採集・漁撈する食料採捕経済に依存してきた。そして約 10 万年をかけて地球の至る所へ拡散し、その高い適応能力を駆使しながら様々な自然環境に順応してきた(海部 2005)。だが約 1 万年前、農耕や牧畜の開始とともに、人類はその生活様式を大きく変質させた。一般的に「食料生産革命」(あるいは「農業革命」)として知られるこの出来事は、食料生産の安定化をもたらし、人口の爆発的な増加を可能にし、その規模に見合う様々な社会制度を発達させることとなった(ハラリ 2016)。それ以降、人間社会は飛躍的な発展を遂げることとなったのである。

食料生産革命はしばしば人類史に起きた「革命的な出来事」の一つとして挙げられるが、これに対して考古学者の西田は、約 1 万年前に始まった定住こそが革命的な出来事であったとして、これを「定住革命」と呼んだ(西田 2007)。人類史の 99%以上が狩猟採集の時代であったとは、遊動の時代でもあったことを意味する。ゆえに「人類が獲得してきた肉体的、心理的、社会的能力や行動様式は遊動生活にこそ適したものであったと予想することもできる」(西田 2007: 17) というのである。

この指摘が妙に説得力をもつのは、遊動が圧倒的な歴史の厚みを有しているからだけではない。遊動が人間社会のあらゆる側面に深く関わる生活様式だからである。実際、西田は遊動の機能的側面と動機として以下の五つを挙げている(西田 2007: 22-23)。

(1) 安全・快適性の維持

- a 風雨、洪水、寒冷、酷暑を逃れる。
- b ゴミや排泄物の蓄積から逃れるため。

(2) 経済的側面

- a 食料、水、原材料を得るため。
- b 交易をするため。
- c 協同狩猟のため。

(3) 社会的側面

- a キャンプ成員間の不和の解消。
- b 儀礼、行事を行うため。
- c 情報の交換。

(4) 生理的側面

- a 肉体的、心理的能力に適度の負荷をかける。

(5) 観念的側面

- a 死あるいは死体からの逃避。
- b 災いからの逃避。

概念上、遊動に対置される定住とは、これら遊動が担ってきた諸側面を別の何かで代替することによって成立する生活様式である。つまり定住生活を送るためには、自然の猛威から身を守るために強固な家屋を建設しなければならないし、ゴミの集積による不衛生さを解消するためにゴミ捨て場を定めなければならない。成員間の不和を解消するために利害関係のない第三者を要請しなければならないし、死を処理するために特殊な施設を設けなければならない。こうした事柄を面倒と思うかどうかは問わないにせよ、定住生活では遊動生活で必要のなかったコストを必要とする。定住とは遊動が支えてきたあらゆる側面を「自らの世界に抱える生活システム」(西田 2007: 67) だからである。逆に遊動とは、人間が生活する上で直面する様々な問題を、「自ら動く」という極めてシンプルな方法で処理する生活システムといえよう。

上記は狩猟採集民の遊動を念頭に置いたものであるものの、西田の議論は遊動と定住それぞれの特質を理解する上で極めて示唆的である。言うなれば、定住とは自らの身体を特定の土地に結びつける代償として、生活する上で直面する様々な問題や課題を自ら引き受けなければならない内向的な生活様式ともいえる。逆に遊動とは、それ自体が生活上の問題や課題を処理する機能を備えていることもあり、身体と土地との強い結びつきを必要とせず、ゆえに自らの身体を常に外部に開いておくことが可能な、外向的な生活様式である。この点において、遊動と定住を居住形態の差異としてのみ理解することは、その本質的な意義を看過することになりかねない。両者の差異は、身体と土地との関係を介した世界との関わり方、つまりは世界に対する向き合い方の差異として理解されるべきだろう。そしてこの知見を考古学的知見に留めるのではなく、人類学的視点からより発展させていくことを目的に本特集は組まれた。

ここでいう「人類学的視点」とは、過去との連続性を念頭に置きつつも遊動を現代的な文脈に位置づける同時性の強調であり、また遊動を生きてきた人びとに対する内在的理解の強調である。前者は、遊動を「過去の遺物」としてではなく

* 早稲田大学

現代における生活様式の一つとして捉え直すことを意味し、一方の后者は、遊動を外形的に把握されるものとしてではなく、「動く=生きる」という遊動民的生のあり様に関心を向けることを意味する。もともと、このような視点は人類学では取り立てて目新しいものではない。しかしここであえて言及したのは、遊動に対する私たちの認識、言うなれば定住を自明とする私たちの認識を改めて可視化するためである。

遊動と定住の議論には、大きく分けて(1) 遊動→定住と(2) 遊動/定住の二つの問題系があるように思われる。前者は、文明へと至る人類社会の進化を遊動生活から定住生活への移行に求め、約一万年前に始まった農耕・牧畜と同時期に開始した定住化が人類史において「革命的な出来事」であったとする社会進化論的見方である。そして一方の后者は、遊動を定住の対極に位置づけ、あらゆる人間社会はそのあいだのどこかに位置づけられるとする社会形態学的見方である。ここで問題であるのは、いずれにおいても遊動は定住よりも劣位に置かれているという暗黙の了解だろう。すなわち、前者においては定住こそが人間社会のあるべき姿であるとみなされ、一方の后者においては定住こそが人間社会にとっての常態であり、逆に遊動は定住からの逸脱であるとみなされる。ゆえに「遊動」という「古い問題」と捉えられてしまいがちだが、本特集はむしろ、定住を自明とする今日においてこそ、遊動を「新しい問題」として再認識する重要性を主張したい(遊動を「古い問題」とする認識こそが、定住を自明視していることの何よりの証拠である)。遊動の理解とは定住の相対化に他ならず、定住の相対化とは現代社会の問い直しにも通ずる問題であると考えからである。紙幅の制限もあるため、以下、簡潔に説明していこう。

アパデュライを起点とする「グローバリゼーションの人類学」は、様々な境界の越境現象を捉えることに力点を置いた(cf. アパデュライ 2004)。その背景には、それまで土地に根ざすものと考えられてきた「文化」とは本来、人の移動が生み出す異種混交の結果であるとするクリフォードの議論がある(クリフォード 2002)。そして「現代は移動の時代である」という認識の下、人文社会科学では2000年代後半以降に「移動論的転回(mobilities turn)」が起きた(エリオット & アーリ 2016)。ヒト・モノ・カネ・情報が、従来とは異なる次元の速度と数量で世界中を行き来するグローバルな現象を背景に、人はかつてないほどモバイル化した生を生きているという。過去には類を見ない著しいまでの移動現象を伴う現代は、ノマドワーカーや移住者など、自ら動くことを積極的に選択する人びとを生み出す一方で、難民や移民、亡命者、奴隷、被災者など、動くことを強いらられる人びとも生み出して

きた。こうした現象は総じて「定住民の遊動化」と呼びうるが、そこで前提とされているのは、「ホーム」や「故郷」といったノスタルジーを伴う場所性であり、現代社会はそうした場所性が希薄化した「移動の途上(オン・ザ・ムーブ)」(アーリ 2015)にあるというのが、移動論的転回を経由した人文社会科学の基本的な認識である。

だが少し視点をずらすならば、「遊動民の定住化」とも呼ぶべき現象もまた世界各地で散見されることが分かる。「定住民の遊動化」が地球全体を取り巻く境界の変化や革新的な科学技術を背景とする現象であるために、両者を安易に比較することはできないが、移動の時代とされる現代において、遊動は否定されているのである。歴史学者でもあり人類学者でもあるジェームズ・スコットは、国家による統治の技法として近代的な知識や思想による多様性の「単一化(simplification)」を指摘しているが(Scott 1998)、定住化政策などを通じた非自発的定住としての遊動民の定住化は、まさに国家的統治が目指す単一化による暴力として捉えることができるだろう。それは遊動民の身体を特定の土地に縛りつけるだけに留まらず、教育を通じた定住社会への順化(あるいは定住民化)を目指しているという意味で、遊動ゆえに「読みにくい(illegible)」対象であった人びとを、定住させることで「読みやすい(legible)」対象とする国家的企図の一つなのである。

こうした事態の背景には、遊動を定住よりも劣ったものとみなす、「定住中心主義(sedentary-centrism)」とも呼ぶべき現実的な問題を見て取れる。西田はこれを「定住民優越主義」と呼んでいるが、ここではさしあたり、自文化中心主義の一般的な定義になぞらえて、「社会進化論的パースペクティブに基づき、自己が立脚する定住民的価値観を正しいものと考え、その基準によって遊動民を否定的に判断したり、低く評価したりする態度や思想」と定義しておこう。では、定住中心主義の根元には何があるのだろうか。本特集ではこれを、定住民の無知と傲慢、具体的には「世界は不確実に満ちている」という根本原理の忘却にあると考えている。

私たちが生きる世界は不確実性に満ちている。有史以前から、人間の活動とは不確実性への対処であったと言っても過言ではない。自然という人智を超えた存在を前に、人類は命をつなぐためにただならぬ努力を続けてきた。だが万事うまくいくわけではない。いくら高度な技術と知識を手に入れようとも、自然の猛威の前では甚だ無力なのが人間という存在である。このことは、幾多の災害を経験してきた日本に生きる私たちににより自明のことだろう。もちろん、不確実性は自然環境由来のものばかりではないが、少なくとも「世界は不確実

性に満ちている」という自然の摂理に対してその効果を發揮してきたのが遊動である。身体と土地との乖離をその基本的な要件とする遊動は、不確実性に寄り添いながら、時にそれに翻弄されながらも、それを躲すことで、不確実な世界に向き合うことを可能にしてきた。だが身体と土地との結束を要件とする定住ではそうはいかない。ある土地への恒久的な定着を意味する定住とは、自らの身体を土地に根ざした形で改変することで、ある特定の場所を私有化し、そこを起点に世界を見渡す生のあり方だからである。それは生活上の問題や課題を「自らの世界に抱える生活システム」であるために、定住民は自然環境を飼い慣らすことで、世界に内在する不確実性を縮減することに腐心してきたのである。

18世紀末から20世紀に起きた「確率革命」(クリューガーほか1991)を通して確立した確率論的世界観では、そうした定住民の世界に対する向き合い方を明瞭な形で見て取れる(cf. ハッキング 2013)。不確実性を統計や分析、管理といった技術的問題へと集約し、適切な対応さえ講じておけば、不確実性を低下させ、確実性を高めることができるという観念は、ある意味「信仰」に近いものとして近代を生きる人間の認識の奥深くに強く刻み込まれている。ゆえに「想定内」が「想定外」となる事態に私たちは大きな絶望感を覚える。だが裏を返せば、そのような絶望感とは、「世界は不確実性に満ちている」という事実の忘却、あるいは「世界は掌握可能である」という幻想への拘泥にあると言えはしないだろうか。

しかし遊動民は不確実性をそのままに、「自ら動く」ことでこの不確実な世界を生き抜いてきた。ここに、遊動を「新しい問題」として再認識し、定住中心主義の相対化、延いては現代社会の問い直しへと通ずる議論の可能性を見いだせるのではないだろうか。であるなら、遊動と定住を世界に対する向き合い方の差異として捉え直すことで、現代的な文脈において遊動を「古くも新しい問題」として考え直す必要があるだろう。これが本特集に論考を寄せた各執筆者が共有する問題意識である。

大風呂敷を広げてしまったが、これらの主張はあくまで今後の議論の展開を見据えた一種の決意表明として受け取ってもらいたい。以上の問題意識を念頭に置きつつ、まずもって行うべきは、多様な民族誌的事例を通して、現代における遊動民の生のあり様について人類学的視点から明らかにすることである。とはいえ、「遊動民的生」とはやや曖昧な分析概念ではないかと受け止める読者も少なくないのではないかと思える。それはおそらく、これまでの議論において遊動の定義がすっぱり抜け落ちていたからだろう。ひとまずは「社会的、経済的、政治的な日常的諸活動における、居住を共にす

る社会集団の移動」(Salzman 1996: 505)を最低限の定義として示しておくが、本特集では遊動(ないし定住)の厳密な定義づけをあまり重視していない。なぜなら生業様式の特質や自然環境の変異、さらには外部社会との関係などによって遊動の目的や動機は異なるし、それに伴って規模やパターンも異なるために、遊動を厳密に定義することは、議論の射程をいわずらに狭めてしまいかねないからである。さらにいえば、遊動／定住の差異を世界への向き合い方の差異として捉えるならば、両者の社会形態学的定義はさほど重要ではない。

ところで、「遊動民的生のあり様」という問題意識は、奇しくも遊動民の定住化がますます顕著になる今日だからこそより意識されるようになったものでもある。多くの遊動民は、国家へと取り込まれていく過程で様々な社会変化を経験してきたが、その結果、生業様式に伴う遊動実践の頻度や規模は相対的な減退をみせ、すでに放棄されている状況も出てきた。しかしそのような状況でも、生活スタイルを少しずつ変えながら遊動と定住を往来して生きる人びとの姿や、定住生活においても遊動との連続性を有する遊動性が様々な相互行為に発現している現実がある。このことは、遊動を特定の生業様式から完全に切り離すことは困難であるものの、かといって生業様式の否定がそのまま遊動の否定を意味するわけではないことを示している。これを敷衍して言うならば、人びとが遊動に生きるのは、彼らが「狩猟採集民」や「遊牧民」だからではなく、「遊動民」だからであるということになろう。

本特集の目的は、遊動に生きてきた人びとを「遊動民」として等しく扱い、遊動民的生のあり様を今日の文脈において議論することの可能性を広く模索することである。そのため本特集では、狩猟採集民、遊牧民、家船漁民、ジプシー、そしてスラム住民を対象とした。本特集に収められた各論考が捉えようとするのは、定住中心主義が支配的である国家や地域社会のなかでも遊動を実践している人びとの姿や、遊動を放棄してもなお遊動民的生を生きる人びとの姿である。もちろん、両者には遊動のあり方において違いがある。前者は現象として外形的に把握される生活実践としての遊動(nomadism)だが、一方の后者は過去の遊動実践との連続性を前提に人びとの日常的な相互行為を通して把握される遊動性(nomadness)である。より単純化していえば、前者は迫り来る定住化の圧力下に対して形を変えながらも維持される生活実践であり、一方の后者は遊動が実質的に放棄されてもなお、人びとの認識や態度、そして行動に影響を与えている、過去の遊動実践との連続性にある特質のことである。本特集で対象とする遊動民は、生業様式のみならず、そ

それぞれ異なる歴史的背景や周囲を取り巻く政治経済的な状況を生きているために、以上を概念的に区別しておくことで、今日における遊動民的生のあり様を多角的に理解することができるだろう。本特集に収められた各論考をあえてそれぞれに振り分けるならば、寺尾論文と左地論文は遊動実践に、藤川論文は遊動実践と遊動性の双方に、二文字屋論文と西尾論文は遊動性にそれぞれ重きを置いている。そしてこれら位相の異なる遊動に不確実性 (uncertainty) という参照軸を設定することで、「遊動民的生とは何か」(同時にこれは「定住民的生とは何か」という問いにも通じる) という問いに答えるための手がかりを得ることができると思われる。

もっとも、何が不確実なものであるかは、それを認識する主体に拠っている。先に言及したのは自然環境由来のものだが、社会環境由来のものもあるだろう。また国民国家への包摂／からの排除の過程で、国家の存在やマジョリティの存在自体が不確実であると認識される場合もある。また他者との無数の相互行為を通して構成される社会生活に目を転じれば、いつ何が起きるかという事態にも不確実性は内包されている。とくに注意すべきは、不確実性は何もネガティブな側面だけを有するわけではないということである。「リスク・マネジメント」という言葉が象徴的であるように、現代社会では不確実性がどこか良からぬものとの印象をもつが、それは不可知であるがゆえにどの方向にも転じる可能性を内包している。不確実性が好機であるのか危機であるのかは、常に事後的にしか判断し得ないし、また不確実性を好機とするか危機とするかは、不確実な世界にどう向き合っているのかという、遊動／定住に生きる人びとの認識に多くを拠っているのである。

そのため本特集に収められた各論考が取り扱うのは研究対象の生活世界に即した不確実性であり、人びとはどのような状況に応じて遊動を実践したり遊動性を発現したりすることで不確実な世界を生きているのかに強い関心を向けている。それは具体的にどのような議論を可能にしているのか。詳細は各論考に目を通していただくとして、以下では各論考の内容を簡単に紹介しよう。

モンゴルの牧畜民を研究対象とする寺尾は、宿営地の移動時期をめぐる人びとの意思決定プロセスを事例に、牧畜民の移動を前提とした遊動民的生を検討する。モンゴル牧畜民の移動は、自然環境に起因する不確実性をはじめ、非牧民となった親族や近隣に暮らす友人の社会的かつ経済的状况に基づく社会環境の不確実性を背景に、時に不規則な宿営地の移動を誘発する。牧畜民たちは可変的な状況に応じて移動を判断するが、その一方で自らの判断を公に明言

することなく、また他者との判断の齟齬を擦り合わせることはない。彼らは、自らの判断に一定の〈余白〉を残すことで、自然環境や他者との関係をそのときどきで結び直しながら、まだ見ぬ明日に賭けて移動していく。宿営地移動に伴う牧民の意思決定プロセスの動態の事例を通して示されるのは、不確実性を当然のこととして引き受けながら遊動を生きる人びとにとって心地よく調和した生活世界のあり方である。

フランス南西部に暮らすマヌーシュ (ジプシー) を研究対象とする左地は、移動に伴う離合集散を特徴としてきたマヌーシュ共同体が、非ジプシー社会という不確実な環境のなかで、偶有性を抱えつつ変態することで生き抜いてきた様態を検討する。定住化が進む今日でもキャンピング・トレーラーでの移動生活を続けるマヌーシュの共同体では、共同体内部の社会関係を絶えず組み替え、全体としてのまとまりを暫定的なものに留めることで、自らの関与の余地なしに常に別様に变化しうる生活環境に対処する方法がとられる。共同体の境界を可動的に保ち、異なる外部へと開かれながら共同体をつくり変えていく人びとの姿からは、不確実性を制御するのではなく、〈動き〉をもって不確実性に向き合う遊動民的生のあり方が示される。

中国福建省南部に暮らす連家船漁民を研究対象とする藤川は、1960年代に開始された一連の「陸上定居」の施策が、彼らにとって新たな不確実性を生み出したことを事例に、定住本位型社会における連家船漁民の今日の生き方を描き出す。連家船漁民は差別・貧困などの問題の解決と、陸上定住者と同等の権利・未来の実現の契機を「陸上定居」の施策に期待したが、彼らの多くは現在も船という遊動性を確保するツールを維持し、生活・生業空間を水上か陸上の一方に閉じてしまうのではなく、いずれにも開かれた形で生活を営んでいる。そこに浮かび上がるのは、自然・社会環境に潜むリスクの制御を企図した国家主導の複数かつ多方面に及ぶ管理システムが交錯する定住本位型の社会にあって、その状況がもたらす窮屈さと種々の新たなリスクを避けながら、その管理の隙間を掻い潜り、巧みに生きようとする連家船漁民の姿である。

タイ北部に暮らすポスト遊動狩猟採集民ムラブリを研究対象とする二文字屋は、定住化による対内的関係と対外的な関係の質的变化を踏まえながら、定住生活における揉め事とそれに対する人びとの振る舞いを検討する。人びとの日常的な振る舞いには、「身を引く」という基本的な身構えを見いだすことができるが、それは遊動との連続性にある〈動き〉に根ざしたものである。なぜなら遊動とは「ある場所から別の場所への移動」という物理的な運動であるが、それは好まざ

る状況に対して「その場を離れる」という〈動き〉に基礎づけられたものであり、そこには世界の根本原理としての不確実性を飼いながら生きるための「遊動的な身構え」とも呼ぶべき態度が認められる。その意味でムラブリは「ポスト遊牧民」なのであり、定住化は遊動を否定するが定住民化を意味するわけでは必ずしもないことが指摘される。

フィリピンのマニラ首都圏に暮らすスラム住民を研究対象とする西尾は、2009年の台風被害を契機とした災害管理と再開発によるスラム住民の再定住を事例に、半ば強制的な再定住に対して人びとは如何に自らの生活空間を創造してきたかを検討する。スラム住民は不安定で不確実な環境を生き抜くために培われた日常実践を用い、排除や管理に対して抵抗するのでも逃走するのでもなく、再定住地においても生活様式を柔軟に変容させ、空間を再編する。彼らはスラムや再定住地という他者の土地に住まわざるを得ない状況でも、住まうために自らを変化させ続けるなかでも、都市という不確実な世界がもたらすリスクを避けながら、不確実性に來たるべき未来の可能性を賭けてもいる。そこには居住が不安定な状態にある定住民も、定住中心主義的論理が横行する社会においてノマド的生を発現させており、生活様式とは切り離された遊動性を生きる「現代のノマド」を認めることができる。

本特集が遊動的な生のあり様にどれほど肉薄できているのか、また定住中心主義の相対化に向けた試みがどれほど達成できているのかについては読者の判断に委ねつつ、本特集に収められた各論考が、そして本特集全体が、人類学的視点から遊動を議論する可能性に向けた有益な討論の呼び水になれば幸いである。

謝辞

本特集がこのようにして形を成すことができたのは、本特集の元となったシンポジウムにおいて、中谷和人氏（京都大学）と東賢太郎氏（名古屋大学）から建設的な批判と助言を受けたからである。両名にはこの場をお借りし深く感謝申し上げます。また、発表者がそれぞれのフィールドで漠然と抱えてきた問題意識を明確にする機会とそれを議論する場を提供してくださった南山大学人類学研究所の方々にもお礼申し上げます。

参考文献

- アパデュライ、アルジュン
2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』 門田健一(訳)、平凡社。
- エリオット、アンソニー&アーリ、ジョン
2016 『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』 遠藤英樹(監訳)、ミネルヴァ書房。
- クリューガー、ロレンツほか
1991 『確率革命——社会認識と確率』 近昭夫ほか(訳)、粹出版社。
- ハッキング、イアン
2013 『確率の出現』 広田すみれ・森元良太(訳)、慶應義塾大学出版会。
- ハラリ、ユヴァル・ノア
2016 『サビエンス全史(上)——文明の構造と人類の幸福』 柴田裕之(訳)、河出書房新社。
- 海部 陽介
2005 『人類がたどってきた道——“文化の多様化”の起源を探る』(NHK ブックス)、NHK 出版。
- クリフォード、ジェイムズ
2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』 毛利嘉孝ほか(訳)、月曜社。
- 西田 正規
2007 『人類史のなかの定住革命』(講談社学術文庫)、講談社。
- Salzman, Philip. C.
1996 『Nomadism. In *The Routledge Encyclopedia of Social and Cultural Anthropology (Second Edition)* . Alan Barnard and Jonathan Spencer (eds.) , pp. 505-507. Routledge.
- Scott, James. C.
1998 *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed.* Yale University Press.
- アーリ、ジョン
2015 『モビリティーズ——移動の社会学』 吉原直樹・伊藤嘉高(訳)、作品社。

Facing, Moving, and Living with Uncertainty

Shu NIMONJIYA*

This special issue aims to discuss nomadism in the context of today—trying to relativize the sedentary-centrism, by exploring ethnographic cases of nomadism through an anthropological perspective. This special issue is the outcome of the symposium “Living in Uncertain Worlds: Bodies Living between Nomadism/ Sedentarism” which was conducted on 3rd May 2018. The symposium consisted of two commentators and five presenters who researched different objects: hunter-gatherers, pastoralists, boat dwellers, gypsies, and slum dwellers. The papers in this special issue have been revised based on feedback from the symposium. As a preface, we want to share the basic topics, touching on some keywords in this issue.

Keywords:

nomadism/sedentarism, uncertainty, sedentary-centrism, nomadic practices, nomadness